

北アルプス北部山麓の下層植生に対する大型草食獣の影響

黒江美紗子¹・尾関雅章¹・大橋春香²・堀田昌伸¹

過去100年ほどニホンジカが生息してこなかったと考えられる北アルプス北部の山麓を対象に、下層植生への採食痕や足跡、糞などの大型草食獣の痕跡を調査することで、ニホンジカの分布拡大状況を考察した。主な痕跡は植物への採食痕であり、木本42種で観察された。大型草食獣(ニホンジカおよびカモシカ)の採食痕数や、ニホンジカの痕跡(シカ道や糞)は、小谷村から大町市にかけて南に行くほど増加した。植生改変は、大町市の鹿島や小熊山で最も進んでおり、林床にはニホンジカ不嗜好性植物であるフタリシズカやテンニンソウが多く生育していた。ハイヌガヤやエゾユズリハ等では採食痕の出現に地域差がない一方で、マユミ、コマユミ、カエデ類はニホンジカ不嗜好性植物が記録された地域を中心に採食痕が記録されたことから、これらの種はニホンジカが好んで採餌していることが示唆された。ニホンジカの痕跡が最も多かった大町市鹿島では、その高標高域にあたる爺ヶ岳稜線へのニホンジカ侵入がたびたび報告されており、山麓での密度増加が高山帯にも波及していると考えられる。白馬村内で比較的多くの痕跡が確認された八方や五竜、岩岳でシカの密度増加が進めば、これらの高標高域にあたる唐松岳、白馬岳でも希少な高山植生の消失や改変が生じるだろう。

